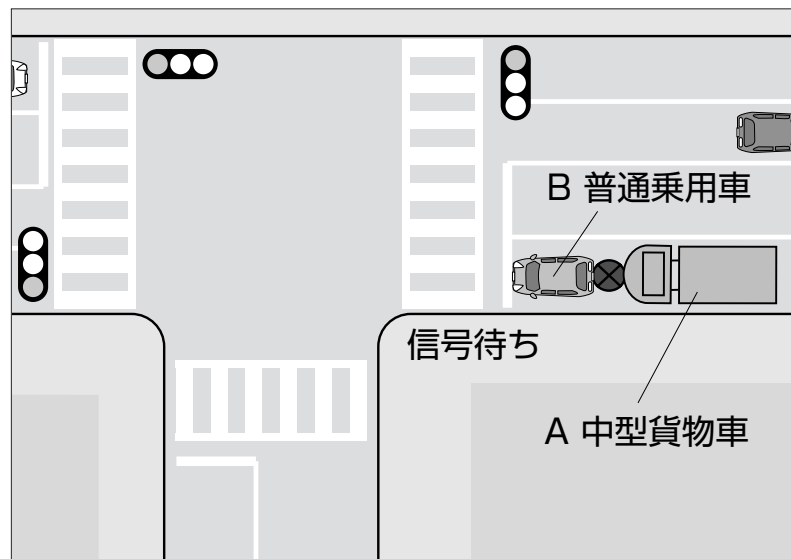


# 職場における交通安全指導

Part 99

■ 中型貨物車が、信号待ちで停車した普通乗用車に追突



## 安全指導

### ① 考え事による気の緩みに注意

運転者が、配送業務の緊張感から解放され、帰路でホッとした時、考えごとが浮かび、それが気の緩み、油断となり事故につながる 경우가少なくありません。

運転中は常に緊張感を持ち、車庫に戻ってキーを抜くまでは運転に集中しましょう。

### ② わき見運転に注意

追突事故の原因の多くは、わき見運転によるものです。

たとえ少しのわき見であったとしても、目隠しをした状態で運転しているのと同じです。運転中は喫煙、お茶やコーヒー等の飲食、伝票の整理や確認、地図を使っての行き先の確認等、わき見運転となる動作が多いので十分注意しましょう。

### ③ 夜間の運転に注意

この事例は、日も暮れた夜に発生しました。

夜間は昼間と比べ視界が悪く、発見の遅れや見落としによる事故の危険が増加します。

速度を抑え、前車との車間距離をしっかりと確保して、気持ちにゆとりを持って運転することはもちろんのことですが、横断中の歩行者等で前車が急停止することも考えられますので、慎重な運転が必要不可欠です。

前方をしっかりと確かめ、周りの交通状況の確認に徹しましょう。

### ④ 渋滞中の道路の運転に注意

渋滞中は、ノロノロ運転によるものや渋滞の最後尾で発生する追突事故が多く、前方に対する警戒が必要です。

特に高速道路では、長距離運転や長時間運転による疲労で注意力が鈍り、走行中の車両と停止中の車両の判断を誤り、渋滞の最後尾で追突事故を起こしてしまうことが多く、十分な注意が必要です。

### ⑤ 運転者に対する指導

(1) 運行管理者は、運転者の体調等の変化に気付くためにも、普段から運転者とのコミュニケーションを良好にし、運転者が疲労や健康に関して異常を感じた時に、相談し易い職場環境をつくる必要があります。

当日のAは、乗務前点呼で体調不良を運行管理者に的確に伝えるべきでした。また、運行管理者も、点呼の際にAの疲労の状態等をしっかりと把握して、適切な運行管理を行う必要がありました。

(2) 運転者は、狭い車内で一定の姿勢で運転しているため、肉体疲労を覚えます。

また、刻々と変化する交通状況をしっかりと捉え、常に正しい判断と運転操作が要求されるため、精神的疲労も出てきます。

こうした疲労が重なると注意力が低下し、反応も鈍り、居眠り運転にもつながりかねません。

運行管理者は点呼の際、睡眠時間、疾病の有無（持病のある場合は、現在の状態と通院の確認）等、運転者の身体的な健康状態とともに、精神的な面においても悩みがないかを把握し、適切な指示を与えることが大切です。

(3) 乗務前点呼では、運転者の健康状態、疲労の度合、睡眠不足、酒気帯びの有無、薬の服用の状況について確認します。

ポイントとして、運転者の歩き方、服装、目の動き等を観察することです。

(4) 乗務後点呼では、その日の運行で疲れが溜まっていないか見極めます。運行管理者からの「お疲れさま」という労いの言葉が、運転者の励みや疲労解消に繋がることを理解しておくことも重要です。

乗務前後の点呼は、事故の防止をはかる上でとても大事なことです。これらの指導を励行していただき、新年も事故の根絶を目指してください。

## ■ 事故の概要

### ● 発生状況

日時：平成23年1月某日 午後7時30分頃  
天候：晴れ

### ● 発生場所（道路状況）

片側2車線のT字路交差点

### ● 事故の当事者

運転者A（中型貨物車）：55歳、男性  
相手方B（普通乗用車）：27歳、男性

### ● 被害状況

A：車両前部小破  
B：頸椎捻挫等（全治2か月）、車両後部大破

## 事故状況

Aは、トラックの乗務経験30年の運転者で、免許証を取得してから無事故運転を継続し、社内からも信頼され、本人もこれに応えるべく安全運転

に努めていた。

事故発生の3か月前から母親が身体の具合が悪く、病院に入院しており、妻と交替で母親の看病をし、看病の疲れが残った状態で乗務する日が多く、事故の当日は、疲れを感じながらも運転し、配送を終え帰路につき、県道を時速約40kmで進行していた。

Aは、いつも通り慣れているコースで会社に戻る途中、母親の身体の具合のことを考えながら運転し、赤信号で停止している普通乗用車に気付くのが遅れ、急ブレーキをかけたが間に合わずに追突、Bを負傷させた。

この事故の原因は、Aが考えごとをしながら運転をしたため前方の交通状況に対して警戒心が薄れ、漫然運転となったことで安全確認を怠ったことが挙げられる。

また、漫然運転や前車の見落としに至った背後には、仕事や母親の看病の疲れが影響したことも考えられる。